

# 球児のモノがたり

3

# 甲子園で再びあの歌を

1909年創立の伝統校・

寝屋川(寝屋川市本町)の生徒手帳には、校歌の詞の隣に

「幻の応援歌」の詞が載る。いまの生徒で歌える者はいない。

「打てや高らかに」「河内の原に」など計4曲。いずれも、寝屋川が選抜大会に初出場した1956年の前に、甲子園での応援のためにつくれたものだ。

寝屋川は56年春と翌年春夏の計3度、甲子園に出場している。58年に寝屋川に入学生し、応援団に所属していた天岡孝芳さん(75)は「当時は野球部が強く、生徒の応援も熱心だった。全員が応援歌を歌えた」。三回の攻撃中は穏やかな曲調の「河内の原に」を、五回にはアップテンポで勇ましい歌詞の「打てや高らかに」を歌い、試合を盛り上げたという。

応援団での思い出を語る天岡孝芳さん=寝屋川市本町

## 応援歌



## 寝屋川

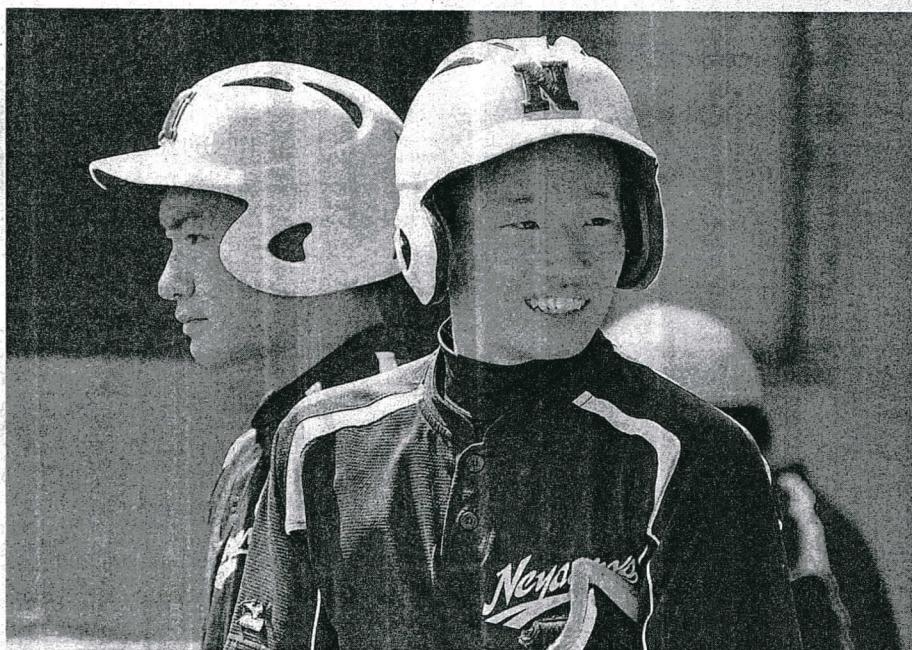
「全員の力を合わせて、今年は甲子園に行きます」

今年5月にあつた寝屋川野球部のOB総会。3年生で主将の一貫田裕貴君は、OBを前にそう宣言した。

一貫田君は1年前のOB総会でも、2年生の代表として

61年に寝屋川を卒業した天岡さんは、66年に体育教諭として母校に戻り、94年まで在籍した。当時は応援歌を歌える生徒がいたが、天岡さんの離任後は歌われる機会が減少し、いつしか忘れ去られてしまつた。

## 1950年代作成 いつしか忘れ去られ



練習試合に臨む一貫田裕貴君(右)と藤原涼太君=大阪市住吉区

「自分たちの代は甲子園を狙います」と宣言している。2年連続で誓った「甲子園」は、決して口先だけの目標ではない。

今春の府予選準々決勝の大坂桐蔭戦で、寝屋川は1点を追う八回に4点を奪つて逆転。最後は九回2死から逆転

年も「自分たちより強い高校はいくらでもあるけど、一つ一つ勝てば(甲子園に)たどり着ける」と話す。一貫田君も藤原君も、生徒手帳に残る「幻の応援歌」の存在を気に留めたことは、こ

結局、応援歌の音源がないためメロディーがわからず、野球部員だけでは再現できなかつた。ただ、吹奏楽部員も応援に駆けつける甲子園では、残された楽譜をもとに応援歌を再現できそうだ。「どんな曲なのか興味がある。北大阪大会で優勝して、甲子園で聞いてみたい」

サヨナラ負けしたものの、春の選抜大会優勝校を土壇場まで追い詰めた。一貫田君は「甲子園は決して届かない場所じゃない。これまでより近くに感じることができた」。この試合で完投したエースの藤原涼太君(3年)も「自分たちより強い高校はいくらでもあるけど、一つ一つ勝てば(甲子園に)たどり着ける」と話す。

も卒業生も、寝屋川高校にかかるみんなが一つになれば、ピンチで力がもらえると思ったから」

かつて応援歌に親しんだ元部員たちも、甲子園での復活を待ちわびている。

64年に入学し、卒業後は部のOB会長も務めた北村譲さん(70)は、いまでも応援歌を口ずさめる。「必死で打席に立っているときも、応援歌は耳に届いていた。甲子園でも一度、あの歌を響かせてほ

れまでなかった。だが、甲子園に出場した時代の応援歌だと知り、興味がわいた。

藤原君は、北大阪大会の自分の打席で流れる応援歌に、「手帳に載っている応援歌を使えないか」とリクエストした。